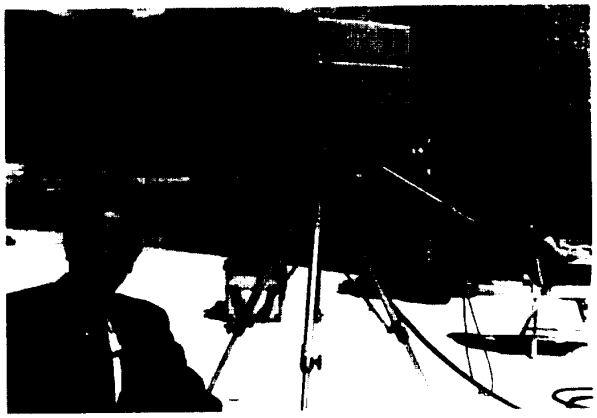
Meteorological Society of Japan

会員の広場

# アメダス創設者木村耕三博士略伝

## 1．はしがき

テレビ天気予報に必らず出てくるものは天気図と衛星写真，そしてアメダスによる降雨状況，時にこの他レーダー合成図が加わる．特に前三者はいわば天気予報番組の三種の神器である．このうちのアメダスを開発したのは木村耕三博士である．木村は気象庁地震課長を勤めたこともあり，気象庁定年退職後，「三陸へ逃げる」の名言を残して岩手県三陸町に住んだ．木村耕三についてはマスコミ関係ではむしろ，こちらの方が有名だったらしいが今では，「木村死してアメダス残る」の感がある．私はアメダス創設者としての木村耕三のプロファイルに迫りたい．



在りし日の木村耕三氏
（木村妍子氏提供）

## 2．木村耕三の略歴

木村耕三は大正2年（1913年）10月10日，東京都に生まれている．父は銀座に医院を持つ開業医と聞いている．自宅は赤坂であったという．旧制高等学校は名古屋の第八高等学校で，それから東京帝国大学理学部地震学科を卒業している．就職は当時の満州国中央観象台（新京市）であった．戦時中，軍に召集され航空軍の気象将校となり，同じく新京に勤務していた．1945年，ソ連参戦で満州国は壊滅した．木村はソ連に1年8か月抑留されて帰国した．そして中央気象台に復職することが出来た．後，23年に北海道千歳測候所長となり，さらに旭川地方気象台長となり，38年本庁測候課長として東京に戻るまで15年間を北海道で過した．のち地震課長，仙台管区気象台長を経て，気象庁観測部長となり定年退職している．旭川在勤中に北海道大学（孫野教授）から理学博士の学位を得ている．

## 3．若き日の木村耕三

軍隊での木村耕三は古参中尉であり，独身将校のリーダーであった．後輩が次々と結婚する中で平然たる態度で，黙々として読書していた．当時有名であったクローモフの「天気解析と予報入門」のドイツ語版であった．が決して群から離れていたわけではなく，仲間の連中がワイワイ歓談している時，彼は1人窓辺で本を読んでいるかと思うと，時々野次を入れたりウイットに富んだ冗談を言ったりして皆を笑わせていた．木村は江戸ッ子の粋をもった男であった．木村は大柄であり，顔立ちも大きく立派であった．今にして思えば若き日の尾上梅幸に似ていた．

夏の暑い日，木村は窓を背にして執務中，背後の窓枠が上の方からはずれて，ゆっくり倒れ，ために木村は頭から窓ガラスを被ることになり，鼻を切ってしまった．木村は自分できつく鼻をおさえて営庭を小走りにして医務室へ駈け込み，軍医に縫ってもらった．この時の軍医U中尉は今なお宮崎県で健在である．この傷跡は幸い後日全く目立たなかった．

## 4．木村耕三とアメダス構想

木村耕三が旭川台長時代，私は山形地方気象台技術課長であり，木村と同様に私も同じ職を11年勤めた．私はその頃，集中豪雨を主としたメソ気象現象の解析的研究に精を出していた．気象庁研究時報に掲載された私の論文を木村は見ていたにちがいない．私は木村より5年おくれて本庁勤務となった．私が山形にいるうちか，上京してすぐか，今となっては忘れたが，私は木村から次の質問を受けている．「集中豪雨をキャッチするには全国スケールとして，どの程度の密度で観測所を配置すればよいか」ということである．私はアメリカにおけるこの種の研究結果を考慮して，「雨量については17キロメートル，他の要素については21キロ

© 1996 日本気象学会



NII-Electronic Library Service

Meteorological Society of Japan



メートル」と答えたと記憶している．後者の数字はあるいは少しちがっていたかも知れないが，現在のアメダスには上記の数字が使われており，私はアメダスの観測点の格子間隔を定めたのは自分であると思っている．

私の聞いた話では，ある時点で木村耕三が現在のアメダス構想をうち出した時，あまり賛同は得られなかったと聞いている．最も反論したのは藤原寛人氏(のちの新田次郎）であったとか．無線技術者であった藤原は当時無線ロボット雨量計を考案し，すでに実用化されていたからである．どうやら当時の木村耕三は四面楚歌であったらしいが，そんなことで引き下る男ではなかった．観測部長時代にこれを完成させてしまった．当時の観測部のスタッフが部長を助けたことは言うまでもない．アメダスは昭和49年に運用が開始された．

## 5．木村耕三はなぜアメダスにこだわったか．

観測部長時代，何人かで夕食を共にしたことがある．場所は赤坂であった．赤坂といっても料亭ではない．何々共済組合東京宿泊所といったところである．その時，木村は「今頃，この辺に俺の家があったらなあ」と呟いた．彼の若い頃は赤坂に家があった．赤坂は起伏の多い土地である．ある夜豪雨があった．この豪雨が木村家に何らかの災いをもたらしたようである．木村にとっては雨量の早期把握はどうしてもやりとげねばならぬことだったのである．

## 6．木村耕三「三陸へ逃げる」

木村耕三にはもう一つの仕事があった．それは大都会が地震に襲われた時の対策のおくれへの警告であった．それは地震課長時代での痛感であろう．

木村部長が定年も近くなった頃，「部長は退職後どこに落ち着かれるのですか」と尋ねたら，「俺は少し遠くだ」と言うので茨城県北部ぐらいかと思ったら岩手県三陸町であったのには驚いた．どうもこれはロケット観測所の敷地選定に出張した際にひそかに心に決めたことらしい．その頃，木村の言う大都会の地震対策のおくれの指摘はマスコミ関係にも認められ，それなりの話題になっていた．木村は「三陸へ逃げる」という一冊の本を残して，本当に三陸へ行ってしまった．「まあ，スタンドプレーかな」と呟いた．

## 7．三陸町での木村耕三

三陸町で木村耕三は北里大学水産学部の物理の講義を担当していた．その他の時間は多分，文筆や読書であったと思われる．

不幸にして病を得，69歳の若さで亡くなられた．亡くなる直前に東京からあるジャーナリストが訪問インタビューしており，その記事が追悼文になってしまった．亡くなったのは昭和58年(1983年) 6月7日であった．同日付で勲三等瑞宝章が贈られている．

奥様妍子夫人は鶴見の総持寺で立派な告別式を営まれた．

木村耕三の墓は同寺の境内にある．木村耕三は死んだがアメダスは毎日稼動している．また木村が指摘した大都会での地震対策のおくれは，不幸にして阪神・淡路大震災で適中したが，それを契機として各地で対策が見直されている．木村耕三もって冥すべしであろう．

## 付　記

アメダスは正式英文名（Automated Meteorological Data Aguistion System）の頭文字をとった合成語AMeDAS である．この命名者は当時の気象庁清水逸郎氏と聞いている．アメダス創設のいきさつは私の知る限りの記述で，もし事実誤認があったらお許し願いたい．

なお，奥様はお子様のはからいで，埼玉県狭山市に移られてご健在である．

（島田　守家）



NII-Electronic Library Service